星が丘学舎の今昔

学園理事長　小林素文

１９５９年3月31日、雲一つない淑徳晴れの朝、淑徳の全校生徒と教職員２０００人が、校旗を掲げ、威風堂々、池下から星が丘まで行進をいたしました。

戦前戦中戦後を31年間過ごした池下学舎に別れを告げ、星が丘学舎に引っ越しをした日の風景です。

あれから59年。本年4月から星が丘学舎での60年目が始まります。

１１３年に及ぶ学園の歴史の半分以上を築いてきた星が丘学舎の今昔を見ていきましょう。

進路の今昔

星が丘に移転した１９５９年の高校進学率は55％、大学進学率はわずか10％。ようやく日本が戦後の混乱を脱し高度成長へと向かっていく時代でした。

淑徳の生徒の進路も、その年は就職が42％と最も多く、大学進学は25％。大学といっても短期大学がほとんどで、4年制大学進学は６％に過ぎません。就職も進学もせず家庭で花嫁修業をする者も15％いた時代でした。

やがて、高校進学率も大学進学率も急速に伸びていきます。本学園もこうした時代の流れを見据え、１９６１年に愛知淑徳短期大学を設立し、初めて高等教育に参入。そして、そこへの進学が淑徳生の中心となっていきます。

星が丘学舎に移って10年目、１９６９年の淑徳生の進路は、大学進学が76％、就職が10％とようやく大学進学が大勢を占めるようになりますが、4年制大学へはわずか11％で大半は短期大学でした。中でも愛知淑徳短期大学へは２６８人と全生徒の45％を占めていました。

その後、日本も順調に発展していき、社会も変貌し、女性に期待される役割も大きく変わっていきます。

そうした流れをとらえ、本学園も１９７５年に4年制の愛知淑徳大学を設立。やがて、女子の4年制大学指向が高まり、愛知淑徳短期大学はその役割を終え、２００１年に閉学します。

淑徳生の大学進学先で4年制大学が短期大学を上回るのは１９９０年からで、学部は家政系・文系が大勢でしたが、現在はほとんどが4年制大学、学部も医学、理学、工学、農学と多彩で、今昔の感があります。

校舎の今昔

東洋一の高校校舎

淑徳学園で完工式

名古屋市千種区桜丘一愛知淑徳学園（小林素三郎校長）で高校校舎としては東洋一といわれる新校舎の完工式が16日午前七時から行われた。

…中略…

緑の山々を見下ろす丘の上の豪華な建物は多くの若人に新しい心の故郷となるだろうとは同校の先生の話だった。

（中日新聞夕刊一九五九年五月一六日）

新聞記事で東洋一と称賛された校舎で生徒たちは溌剌とした学校生活を送り、卒業生たちにとって星が丘学舎が文字通り心の故郷となっていきました。

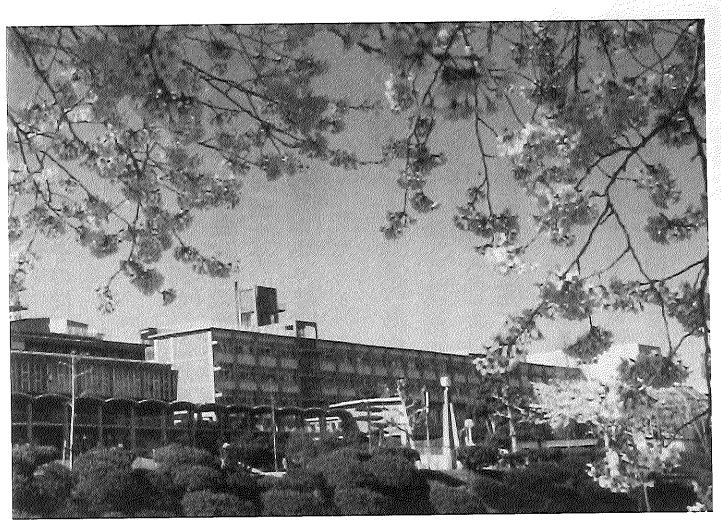
自慢の校舎も40年を超えるころから老朽化が始まります。何よりも１９９５年の阪神神戸大震災を目のあたりにして、校舎の耐震性を高めることが最重要課題となります。

本学園は、２００５年が創立１００周年となることから、そのメイン事業として、中高校舎を思い切って全て建て替える決断をします。

２００３年の秋、淑徳晴れの日、大勢の卒業生たちが母校にやってきました。

……この星が丘校舎が生まれ変わると聞いて、ＯＧの中から「ぜひ思い出の校舎に別れを」という話が持ち上がり、中・高校の正門工事が始まる二日前の10月25日、「まなび舎につどう会」と称した一大イベントが開かれました。

開催準備中、協力する人がどんどん増え、実行委



桜が映える旧校舎

員会は60名をこえるまでに。連日遅くまで準備が続き、最終的には参加者はなんと２０００人！高女時代から昨年度の卒業生までが参加する大同窓会となりました。

開催当日、受付は久々に顔を合わせる卒業生でにぎわい、会場の大アリーナでは立ち見も出るほどでした。退職された先生50名が来校され、名前が紹介されるたびに会場はどよめきがおこりました。…（愛知淑徳学園広報誌79号）

同広報誌にはＯＧの小野節子さんの次のメッセージが紹介されています。

高１の途中、池下校舎から星が丘の新しい校舎まで、全員、椅子を持って歩いてきたんですよ。建物がスマートで、雑誌の撮影をしていたのを覚えています。今日は大阪から来ました。

新しい校舎づくりの中心であった石川紘介学監の「生徒にとって居心地の良い学校にしたい」との思いを受け、これまではなかった、生徒と先生、生徒間の交流ラウンジ、カフェテリア、センテナリーホールなどがある斬新な新校

舎での学校生活は２００６年４月から始まりました。

その年は、中高一貫教育体制が始まり、その一期生が入学した年でもありました。

呼称の今昔

現在の「星が丘学舎」の住所は「名古屋市千種区桜が丘23番地」ですが、星が丘に移転した当時から１９７６年までは「名古屋市千種区田代町瓶入３の14」でした。にもかかわらずその間も「桜が丘」の呼称を用い「名古屋市千種区田代町桜が丘一丁目３の14」とし、この地を「桜が丘学舎」と称していました。

移転当時の星が丘は田んぼや畑が広がる里山の風情。春には桜が美しく咲き誇る場所であったので、学園も桜を多く植樹しました。それで、正式地名の「瓶入」を「桜が丘一丁目」として文書や通常郵便で用いているうちに通称として認められるようになりました。

学園が植樹した桜は、花が美しいソメイ吉野でしたが、20年もすると大きく成長し、近所でも有名になりました。しかし、ソメイ吉野は40年もすると老木となり枝折れの危険があること、葉から落ちる毛虫が近所迷惑となっていたことなどから、枝切りや伐採を繰り返すうち、学園の桜は少なくなり、周辺の桜も星が丘の発展とともに少なくなっていきました。

創立百周年のおり、学園には「長久手学舎」があるので、それぞれの場所が分かりやすいようにと「桜が丘学舎」の呼称を「星が丘学舎」に変更し、現在に至っています。

＊

学園の移転とともに星が丘に引っ越した中学１年生の筆者は、野兎を追ったりして野原で遊んでいました。それも今は昔。星が丘にはマンションがそびえ、当時の長久手村も長久手市となりました。

時代は変われど、夢を抱き、淑徳魂を発揮し溌剌と学校生活を送る生徒たちが、学園の伝統を築いていることに、今も昔も変わりありません。卒業生と生徒の皆さんありがとう。生徒を支えて下さるＰＴＡの皆様に心より感謝を申し上げます。